

そうじの力だより

VOL.183



支援事例紹介



「捨てる」とは「執着を断ち切る」こと。
「やらせ」感から自主的な創意工夫へ

兵庫県丹波市の(株)森田石材店。さまざまな業務を「見える化」し、適切な管理ができるよう、整理整頓の行き届いた会社を目指しています。

この「そうじの力」プロジェクトも三年目に入りました。同社では、本社事務部門、葬祭部、技術部、本店営業部、篠山店、滝野店というそれぞれの部門が、お互いに協力しつつも、良い意味で競い合って活動を進めています。

毎回の研修会においては、持ち回りで各部門の現場を見て回ります。改善を要する点については、いっそうの奮起を促し、改善が進んだ点については、褒め合い、他部門にも拡げていきます。

同社の共通した課題は、「モノを捨てる」こと。トップから末端まで、なかなかモノが捨てられず、当初はさまざまなモノがあふれていました。

本社の敷地内には、石材の在庫が山積みになっていました。もちろん、使うあてのある在庫は取っておくべきなのですが、中には、石種や形状から、使わない石もない石もありました。それらに見切りをつけて、時間のかかりました。



以前の石材置場

「石材＝宝」という意識を、「使わない石材＝ゴミ」という意識に転換することで、ようやくこれらの在庫を処分することができました。

これによって、



現在の石材置場

本社の敷地内にあった石材用のラックを半分撤去するところとが、空きスペースを有効活用することができるようになりました。荷受け作業がしやすくなり、トラックの駐車スペースも確保できるようにになりました。

この石材在庫の処分には、森田茂樹社長の並々ならぬ決意が表れています。先代、先々代から受け継いだ石材を処分することは、大きな勇気が要したことでしょう。

次に、販売店にも変化が訪れます。滝野店は、これまでなかなかモノが捨てられず、活動がいまひとつ進まなかった拠点です。

今回、異動があつて人が入れ替わったこともあり、以前とはだいぶムードが変わってきたようです。

以前は書類をはじめとするさまざまなものが収納され、一杯だった書

棚。今回見てみると、中身がスカスカになっていて、ずいぶんスペースに余裕があります。「以前にあつたものはどうしたのか？」と聞いてみると、「よくよく考えると不要なものばかりだったので、捨てました」との答え。

こうしてモノが減り、スペースに余裕ができてくると、残ったものをより機能的にするための配置(整頓)がしやすくなります。



スペースに余裕ができた書棚

また、事務所のデスクも同様に、「机上ゼロ」になっていました。以前のデスクは、パーテーションで仕切られ、それぞれの書類が机上に積み上げられていました。私が行くたびに、机上ゼロにするよう促すのですが、なかなか前に進みませんでした。

様変わりした滝野店を見て、他の部門の社員たちから、「頑張ったね!」「よく思い切ったね!」とお褒めの言葉が出ます。

滝野店の社員いわく、「捨てるも、何の問題もなかった」「やってみると、こちらの方がいい」とのこと。

モノが捨てられないのは、しがらみが

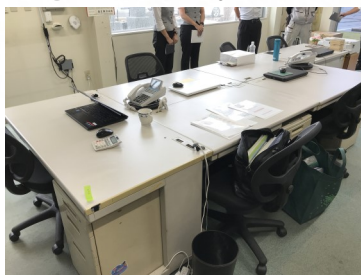
あるからです。変なこだわりがあるからです。執着があるからなので

だからモノを捨てるという事は、しがらみを捨て、妙なこだわりを捨て、執着を断ち切る、ということなのです。

全般的に社員さんたちの話を聞いてみると、「以前はやらせれ感があつたが、今はそれぞれの社員がアイデアを出し合い、より良くしよう」と活動しているというふうです。

今後は、消耗品や販促品、そして商品の在庫についても、より適切な管理ができるように、社内の仕組みを整えていきます。

同社の「そうじの力」は、三年目を迎えて、徐々にですが、着実に実を結びつつあります。(小早)



机上ゼロ化した現在のデスク



以前のデスク周り

新サービス『環境整備診断』はじめました！御社の「健康状態」を環境整備の観点で診断し、改善策をご提案します。詳しくは弊社ホームページをご覧ください。

